●事例紹介●

舞鶴高専と海外協定校との国際交流への取組

舞鶴工業高等専門学校

一　交流の目的と学術交流協定

舞鶴工業高等専門学校（以下、舞鶴高専）は、日増しにグローバル化の進む現代社会のなかで、学校を世界に向けて開かれたものとし、教育と研究の国際化を推進するため、平成一七年以来、アジア各国の大学等と学術交流協定を締結し、交流を続けている。

現在、本校が交流を行なっている協定校は、次の六校である。

・キングモンクット工科大学ラックラバン校（タイ・バンコク）
・高麗大学（韓国・ソウル）
・大連職業技術学院（中国・大連）
・高雄第一科技大學（台湾・高雄）
・交通運輸大学（ベトナム・ハノイ）
・ハノイ建設大学（ベトナム・ハノイ）

本校の国際交流プログラムは、学生交流のみならず教員レベルの交流にも力を注いでいる。

二　学生交流

1　海外研修旅行

毎年、四年生の各学科約四〇名（四学科で一六〇名）を

四ヵ国に派遣し海外研修旅行を実施している。引率には学科の教員二名（うち一名はクラス担任）が当たる。研修の目的は、本校と学術交流協定を締結した各国の協定校を訪問することにより、現地学生と学生同士の友好の輪を築き、現地の文化を体験するとともに、日系企業を訪問して技術者の話を聞き、将来海外で技術者として活躍するための心構えなどの教授を受ける。現在までの交流内容はおおよそ以下の通りである。

（a）学生交流

自己紹介、名刺やe-メールの交換、スライドによる学校や地域の紹介、学生の研究内容についての相互プレゼンテーション、小グループに分かれての様々な討議、等々。

（b）校内見学

小グループに分かれて教育・研究活動や施設等を見学する。

（c）校外見学

・名所旧跡や地域を見学し、外国の文化に肌で触れる。
・現地の企業で働く日本人技術者の話を聞き、将来、技術者として国際的な場で働くため、今、何をすればよいかを学ぶ。

研修を終えた学生たちの声として次のようなものがあった（感想文から一部引用）。

「この学院訪問を終えて海外の人たちとの交流の楽しさがわかった。しかしそれと同時に、今まで以上に語学力が必要であると感じることができた。」

「将来就く仕事によっては海外に行くこともあると思いますので、それに備え英語を勉強しておきたいです。」

「また、大学の寮で宿泊したことによって、よりタイの学生との距離も近くなったと思います。」

「この旅行で学んだこと、感じたことを、今後の高専生活、そして今後の人生に生かせるようにしてゆきたいです。」

高専では学生達に、研修を終え日本へ帰ってからも、海外で知り合った学生と連絡を取り合い、交流を続けていくように奨励している。また、協定校や現地企業の訪問を通して英語学習の必要性を痛感しているので、その気持ちを持ち続け、やがては技術者として世界の人々と交わりを結ぶことが期待される。

2　選抜学生の相互派遣

本校では、交流協定校との間で、インターンシップ等を目的として、選抜学生を相互に派遣し受け入れている。期

間は一ヶ月前後で、インターンシップに対しては単位も与えられる。参考までに協定校との申し合わせを巻末に掲げる（資料1）。

具体的には、平成一八年度以降、タイのキングモンクット工科大学並びに台湾の高雄第一科技大學との間で選抜学生の相互派遣を進め、以下のように、インターンシップとして単位互換を行っている。

（a）タイ王国・キングモンクット工科大学からの受入れ

平成一九年四月二四日から五月二四日までの一ヶ月間、キングモンクット工科大学の学生八名を受け入れた。うち二名は、主として京丹後市の日進製作所内で研修を行ない、平成二〇年度にはその二名が同社に入社した（資料2）。本校では、学生たちの専門分野を考慮し、各学科の教員が課題を与え、個人指導にあたった。留学生は課題を英文のレポートにまとめ発表会で研究内容を説明した後、本校校長より「インターンシップ修了証」が授与され、帰国後本国の大学で単位が認承されている。

また、平成二〇年四月一六日から五月一六日まで同じく八名を受入れたが、キングモンクット工科大学からの受入れ増の要請により、平成二一年度は、インターンシップ協力企業も新規に確保し、二〇名の留学生を受け入れる予定である。

（b）台湾・高雄第一科技大學からの受け入れ

時間的に前後するが、平成一八年六月二八日から約四〇日間、高雄第一科技大學の学生四名を先行して受け入れている。彼らも本校の寮に宿泊し、専門教員による個人指導を受けた。台湾からは、建設工学科の学生を平成一九年の夏に三名、二〇年の夏に二名受け入れ、本校建設システム工学科の専任教員が指導に当たった。

（c）本校からの派遣

平成一九年度以降、キングモンクット工科大学（平成一九年度四名）と高雄第一科技大學（平成二〇年度二名）には本校からも選抜学生を派遣した。特にインターンシップを目的として専攻科生および本科五年生を派遣する場合、協定校からの成績書と修了証、本校での口頭発表に基づき、二単位を認めることにしている。

三　教員交流

1　共同研究の基盤作り

舞鶴高専では、従来、協定校とは学生を中心とした交流を行なっていた。平成二〇年度より、学生交流に加え、共

同研究を主な目的とした教員交流にも力を入れるようになった。

そのため、国際交流一般の担当者とは別に、共同研究の担当者を専門教員のなかから任命し、窓口業務等に当てることにした。これにより、本校と海外協定校の教員間の連絡等が円滑にでき、共同研究の基盤作りができるようになった。

これに伴い、海外研修旅行にも、平成二〇年度から同行する二名を学科の専門教員とし、クラス担任が学生の世話を主に担当するかたわら、もう一人の教員は共同研究の話を協定校の教員と進めることにした。そのきっかけを提供するため、事前に四学科の各教員の研究テーマ表も作成した。研究交流は、各国と個別に取り組むことから始め、やがては二国間の枠を越え、より包括的な国際ネットワークを形成していくことを目指している。

2　国際共同研究の推進

協定校の教員との国際的な共同研究を実施するために、教員同士の共同研究基盤の構築に取りかかっている。現在は台湾の高雄第一科技大学と共同で研究資金を申請中である。今後は二校間のみならず、協定校全体の共同研究ネットワークの構築に努めていくつもりである。

四　長期留学生の受入れ

1　現状

本校への長期留学生は、本科（三〜五年生）に三年間就学する学生と専攻科に二年間就学する学生二名で構成されている。留学生の在籍者数は、本科が一〇名、専攻科が二名で、合わせて現在一二名が在学している。出身国別の人数は、ラオス二名、韓国一名、ザンビア一名、マレーシア五名、モンゴル一名、インドネシア一名、スリランカ一名である。

その多くは試験に合格して来日した国費留学生であるが、なかには保護者の支援によって舞鶴の地で勉学を続けている者もいる。特に私費留学生は苦学を余儀なくされているが、級友や教員に励まされて頑張っている。

これらの留学生には、本校専攻科への進学、日本の大学への編入、専攻科生には日本の大学院への進学を勧め、アドバイスしている。

2　留学生との交流

舞鶴高専では留学生のそれぞれに日本人在学生が一人づつチューターとしてつき、高専での学生生活を支援している。全校生の約三分の二は寮生活を送っているが、留学生達も同じ学生寮で生活している。学内では留学生と日本人学生がともに気軽に集まれる場所を設けたり、各種イベントを開催したりして異文化交流を図っている。また、これらの留学生は、地域の小学校、中学校、高校の国際プログラムの支援を積極的に行なっている。

3　日本への留学を希望する学生への支援

協定校に日本留学に関する情報を提供し、留学を希望する協定校の学生を支援していく。留学生の受入れについては、その人数を三〇万人に増やす計画が前内閣で閣議決定されている。教育の国際化と国際理解のためにも、日本の大学への留学に関する情報を提供していきたいと思っている。また、舞鶴高専としても、

（a）日本国内の大学へ留学生が進学するための基礎学力を養う場

（b）日本企業に就職する道筋を開く場

（c）親日の心を持った将来の要人を育成する場

（d）草の根の交流を促進し、日本と留学生の母国との架け橋になる場

として支援していきたいと思っている。

五　国際交流の教育基盤

海外研修旅行やインターンシップとして学生を学術交流協定校に派遣し、海外の学生や教員と交流できるようにする一方、学内では、その準備として、英語のカリキュラム中、外国人講師による授業を全学年で開講し、四年生以上のクラスではＴＯＥＩＣ対策の授業も行っている。また、一、二年生全員にＡＣＥ（Assessment of Communicative English）、三年生〜専攻科生にはＴＯＥＩＣ団体受験を義務付けている。

さらに学校行事として英語デーを設け、学内で暗唱部門とスピーチ部門に分けた英語プレゼンテーション・コンテストを行っている。この学年優勝者は、近畿地区高専プレゼンテーション大会に出場させている。コンテスト出場者には、英文原稿の推敲、口頭発表の練習、パワーポイントに関する助言など、きめ細かな指導を行っているところである。

六　地域との連携：留学生による地域貢献

舞鶴市内及び近郊の小・中学校並びに高等学校から、毎年、本校の留学生に国際交流教育のための派遣要請があり、留学生たちは文化交流の大使として、自国のこと、その位置や言語・遊び・習慣などを紹介し、地域での国際交流に寄与している（資料3）。また本校は、すでに述べたように、海外協定校からのインターンシップ研修生を地元の企業と協力して受け入れ、交流の輪を広げている。このように、留学生の様々な活動を通して、本校が地域に貢献できれば望外の幸せである。

七　終わりに

舞鶴高専の国際交流は、学術交流協定校との交流を核にしている。これまでは学生交流が活動の中心だったが、平成二〇年度以降、共同研究を中心に据えることにより教員交流は、活動のもうひとつの柱としての役割を果たすことになった。協定校との共同研究はこれから開拓を進める分野だが、相互協力をテーマや予算の面でより緊密にするものと期待している。さらに、日本で普通に行なっている教育や研究が協定校や相手国の参考になり、逆に、日本では見落とされていることが海外では有効活用されている事例に触れることができるなど、予期せぬ収穫もあるので、協定校との交流が互恵的なものとなるように心がけたい。

今後は、学生交流と教員交流が補い合うことにより、学校全体の国際交流が発展するよう努めたい。そうした交流を通して情報や意見を交換し、双方が教育と研究の両面において成長することを目指していく。それにより、学生が海外で通用する技術者に育ち、学校同士、国同士の絆を深めていくことができるよう願っている。

資料１：インターンシップに関する申し合わせ（邦訳）

キング・モンクット工科大学（KMITL）
及び
舞鶴工業高等専門学校（MNCT）
両校間の
インターンシップ計画実施に関する申し合わせ

KMITLとMNCTの間での学生交流に関する覚書に従い、両校は職場内研修（インターンシップ）計画の実施に関し以下の手続きを定めることに同意する。

1．両校は、各校において、あるいは両校が取り決めた他の協力機関において、インターンシップのため、選抜された学生を受け入れる。
2．両校が受け入れ可能な学生数は毎年協議のうえ決定される。
3．各校は研修の最初の４～７日間、研修生の付き添いと監督のため、少なくとも１名、引率教員を任命する。
4．各校は、研修生（および、可能なら引率教員）のため、学生寮での宿泊を無料で提供するように努める。
5．研修期間は一ヶ月までとし、各年度、KMITLの夏季休暇（四月から五月）の間に実施される。
6．各校は以下の点に責任を持つ。
　—バンコク国際空港と関西国際空港の間の研修生と引率教員の旅費
　—研修実施期間の研修生と引率教員の食事および日用品を含む毎日の費用
　—それぞれの国での滞在期間中に必要な研修生と引率教員の旅行保険
7．各校は到着日と出発日、空港と宿泊施設との間の交通手段を提供する。
8．各校はこのプログラムにふさわしい調整係を任命する。両校の調整係は互いに連絡を密に取り合い、計画を成功に導くよう努力する。
9．各校は研修生と引率教員の身分証明書ないしはそれに相当するものを発行し、図書館の利用等、研修に必要な便宜を提供する。
10．研修実施中に緊急事態が生じた場合、調整係は互いに協力して問題に対処する。
11．この実施計画を修正する必要が生じた場合、KMITLとMNCT双方の合意のもとで見直しが行なわれる。

12. この文書は二部作成し、各校が一部づつ保管する。

（署名）	（署名）
Dr. Kitti TIRASESTH President KMITL Date:	Dr. Koichi ONO President MNCT Date: .....

資料２：「文教ニュース」（平成20年８月11日）、「文教速報」（平成20年８月13日）の掲載記事

タイ国キングモンクット工科大学学生が舞鶴高専連携企業に就職

舞鶴高専（小野紘一校長）では、交流協定校の一つであるタイ国キングモンクット工科大学学生をインターンシップとして受け入れているが、平成19年度に受け入れた同学生８名のうち２名が、このたび高専と連携企業である日進製作所（京丹後市峰山町）へ７月に就職した。

これは、タイ国研修生として昨年の来日時に同企業で長期間研修を受け、滞在中に同人たちが同社と高専への親愛を深め、また日本で活躍する素晴らしさを体験したことによる。昨年５月にはインターンシップを修了し、８名全員が新たな経験に感銘を受けて帰国したが、その後も２名は連絡と相談を密にとっていた。この１年間同社からもタイ国を訪れ御両親にも説明を尽くすなど、それぞれの努力が実を結んだものである。

今回の成果は、舞鶴高専が地域の発展と活性化のため積極的に活動し、また国際交流にも弛まぬ努力を重ねてきた大きな賜物のひとつとして、関係者一同喜ぶとともに、同社と今後のさらなる連携を行ううえでも励みとなる。

小野校長からは、「地域に根ざした企業と、今後さらに連携を促進させたい。本日は、良いニュースに接して喜ばしい。」と、一報を知らせてくれた日進製作所幹部にも謝辞を述べた。

特集・大学間連携

資料３：留学生と近郊の小・中・高との交流会

（平成19年度）

年月日	名　　称	主　催　者	参加者数
19. 6.24	インターナショナル 与保呂フェスティバル	舞鶴市立与保呂小学校	７名
19.10. 3	国際交流会	舞鶴市立白糸中学校	３名
19.10.23	国際理解教室	舞鶴市立余内小学校	２名
19.11. 2	ワールド教室	舞鶴市立倉梯小学校	２名
19.11. 7	国際交流会	京都府立東舞鶴高等学校	７名
20. 2. 8	国際交流会	京都府立宮津高等学校	５名

（平成20年度）

年月日	名　　称	主　催　者	参加者数
20. 6.22	インターナショナル 与保呂フェスティバル	舞鶴市立与保呂小学校	10名
20.10. 3	国際交流会	舞鶴市立白糸中学校	３名
20.11. 5	ワールド教室	舞鶴市立倉梯小学校	２名
20.11. 5	国際交流会	京都府立東舞鶴高等学校	６名
20.11. 6	国際理解教室	舞鶴市立余内小学校	２名
21. 2.10 （予定）	国際交流会	京都府立宮津高等学校	６名